

共済会(支)復あつ

れにしても岡大の共済会書籍部は狭すぎる。街中のマンガと雑誌しかないような本屋よりも狭いぐらいいだ。そこに上野先生の日本国憲法や平松先生の物理学実験がちゃんと置いてあるのだからすごい。どんな基準で本を選んでいるのか聞いてみたら「街の本屋には専門書が少ないので専門書を中心に置いています」とのこと。でもどう見ても一般的な専門書があるとは思われない。聞いた事のないような本が多いし、それに今回取材した限りでは専門書なら紀伊国や丸善で買う、という人が多かったのだが。あとどうしても？なのがない置き置きだとも思われないがなんかワケがわからない本が多すぎる。

まあ本が少なすぎること、雑誌が貧弱なことは全て狭い、という原因があるのだ、という

う事はハッキリして納得できる(締めもつく)のだが、本が現金で値引きできない理由についてはどうしても理解できなかった。主任さんの説明では書店の組合があつてその規約で値引きができないというだけだ。別に今は組合に入らなくても書店の開業は出来る(本の仕入れが出来る)そうだし、純然たる民間書店ならともかく、あくまで共済会という大学の福祉厚生事業団体の一部門である書籍部がそんな組合の規約に縛られて学生への不利益を生じているというのはいかにおかしい。独禁法だって改正されて本は再販からはずされたのにな。もし大学生協のように本が現金で5パーセントとか10パーセントで引いてくれたらもっと書籍部で買おうという気になるのだからうけども。この辺運営委員会ぜひ話を聞いて欲しいですね。

第二食堂を建てる土地がないなんていくらなんでもヒドイ話だ

学生委員会は力がない、売り場にしてみれば狭くてもうどいにもいがない、という事なので共済会運営の一番の実力者(?)たる学生部厚生課に直接、運営についてと第二食堂について聞いてみた。

で結論から言うと共済会の運営方針について学生部もあまりハッキリとしたものは持っていないようなのだ。直営部門に対しては

運営について指導もできるが委託部門に対してはどうしても間接的に指導するしかないという。それに関する指導と言っても別に学生部が学生の声を集めてくれるわけでもなく、品ぞろえについてとかどんな本を置いて欲しいか、なんて事はやらない。せいぜい経理面で指導するぐらいじゃないかな。まあ学生部の職員が僕たちみたいだに他の大学の立派な売

さなければならぬという。全くだらね。どうも現状維持が強く出ていて。でも考えてみたら国立大学で学生を育てておいて職員が売店についてのビジョンを建てていざというときはあつたらおかしい事だ。

次に第二食堂と販売部建て換えについて聞いてみたのだがこれが実にヒドイ話なのだ。食堂などの福利厚生施設については文部省が出した面積基準があり、これは大学の敷地面積ではなく敷地面積によって決まっている。だから岡大が国立大学で3番目だか4番目に広いと言ってもあんまり関係ないのだ。そして以前は今の販売部の所に第二食堂と販売部と一緒に建物を建てる計画もあつたという。しかし現在では南キャンパスに第二食堂を建てるのは無理なのだ。それで北キャンパスに建てる事になるのだが、なんと敷地が見つからない。北キャンパスも学部の土地争奪戦のため学生部の使える土地というのがほとんどなくなつてしまつている。そのため新サークルBOX棟などは南キャンパスのはずれの、民家のすぐ近くに建つ事になつてしまつたのだが、まさか食堂となるとキャンパスの隅というわけにもいかず(旧女子寮跡地周辺はすでに学生部の土地らしい)まだ建つメドがつかないという。現在の学生部のある所などから入ってすぐの一等地なのだがここはまた教育学部の土地で、将来学生部が事務局の方へ移つた後は教育学部に返

さなければならぬという。全くだらね。どうも現状維持が強く出ていて。でも考えてみたら国立大学で学生を育てておいて職員が売店についてのビジョンを建てていざというときはあつたらおかしい事だ。

さて厚生課の話では予定地が決まらないうので第二食堂の概算要求(国へ予算を要求すること)はしていない、というのだがこれには気をつけておいた方がいい、なぜなら新BOX建設の時だって全く今と同じ事を言つて学生部は学生にウソをついたからだ。七八年の秋に新聞が学生部に新BOX建設の予定について尋ねたところ「土地がない」との返事だつたのに次の年、七九年六月には突然「予算がおりた」と今の新BOXの場所への建設を発表したのである。

ちなみにおとしの岡大新聞二五〇号(80年6月25日)に載つている元共済会学生委員からの寄稿によると「数年前より当局は、現在の共済会の古い建物のところに二階建て(一階が食堂、二階が売場)の施設をたてる計画があり、概算要求をしているといつてきていた。しかも当局の意図は、この第二食堂を業者委託するつもりでいるらしいのである。(略)昨年の共済会学生委員の追求に対して学生部は、建物は国のものであり、学生に相談しなくてはならないものではない、とその計画を全く明らかにするつもりはないのであ

今日の現実においていかに健康に生きていくか……?

福間健二

今日の現実においていかに生き、健康に生きていくか? 答はどこにも気やすところがない。でも自分で考えてみなければならぬ。しかもこの現実にはしばしばその考える時間を奪いとり去る。一日、なにをしていかにかわからない、そういうように時間があまらぬという場合でも、内的な時間としてはまったく余裕がなく、苛立ちと焦燥ばかりつらくなる。そしてちよつとした事件にぶつたつて、かんたんにうちめされる自分の貧しさをなげく。だれにでもかならずこつた時期があるだろう。また、考えて考えぬいて狂いそうになり、現実との回路を見失つた空白感のなかに突きおとされる時期もある。わ

かつたと思うその根拠がいつのまにかぼろぼろくずれているという体験もある。気がつくといふうちに戻つている、そういう体験もあるだろう。

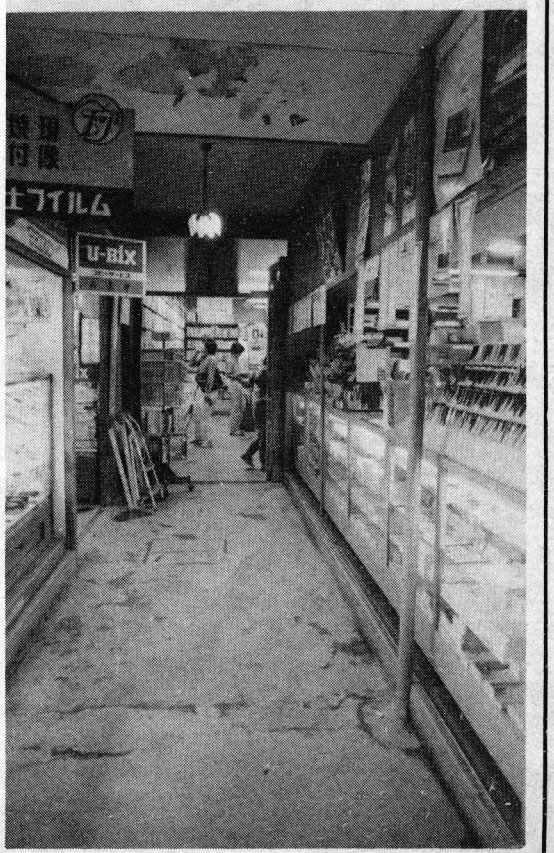
今日の現実においていかに生き、健康に生きていくか? 一方で、こういう問いにたいしてさまざまの脱力的な反応がそれなりにしたたかな表情で返ってくる。むしろ問を立てていること自体に内的な過剰さというべきものがある。それがすでに生きるという現実とどこかでずれがちになっているようにもみえるのだ。

けれども問わなければならぬ。この世界のさまざまな力が複雑にからみあつて、私たちが存在させて

この世界を生きる。その根拠がいつのまにかぼろぼろくずれているという体験もある。気がつくといふうちに戻つている、そういう体験もあるだろう。

今日の現実においていかに生き、健康に生きていくか? 一方で、こういう問いにたいしてさまざまの脱力的な反応がそれなりにしたたかな表情で返ってくる。むしろ問を立てていること自体に内的な過剰さというべきものがある。それがすでに生きるという現実とどこかでずれがちになっているようにもみえるのだ。

けれども問わなければならぬ。この世界のさまざまな力が複雑にからみあつて、私たちが存在させて



さいごにまとめて

初めての共済会特集。この巨大組織について調べれば調べるほど実態がわからなくなるという不思議な経験をされた。よーするにどこが頭なのかハッキリしていないという事だ。

大学当局は陰では何か考えているのかもしれないけれど厚生課はそんな事をおくびにも出さず、学生委員も主任さんも将来の共済会についての明確なプランを持っていない。共済会は時代の変化にとり残されたままほとんど学生離れが進んでいるという現状だ。

かといって以前一部の自治会などがやっていた「生協をつくらう」といった運動も現存する共済会を無視(あるいは敵視)しており、とうとう実現不可能とかあるいは共済会を今新聞会が生協を創ろうとかあるいは共済会をどーこーしようといった大きな口をたた

こうとは思わない。(生協自体は良い事だとも思いますが、セクト化されず本常に学生のための生協になるなら)でも僕たち学生が本来共済会の主役なんだ、という事を確認していかなくても現在の学生生活が良くなって行くのではないかと考えているんだ。どんな問題でもシラけたり縮めたりせずにつかつていきた

それとどうしても心配なのは第二食堂建設の事。来年になるか来年かそれとも五年後か、いずれにせよ第二食堂が建つのは決まつているんだからそれまでにみんなが共済会に関心を持って、学生委員なんかも活発に動けるようになっていってほしい。第二食堂が業者委託で高いものになったり、購読部が相変わらずのオールドファッションじゃイヤでしよ。生協作るとしたらこの時期じゃないしね。せいぜい新聞会が共済会とみんなとのパイ役になれればつて願っている。どんどん意見を寄せて欲しいな。

説であるが、そういう明るさから偽善的なものまでにつきあつたそのさきに現実がどんな暗い力を用意して待っているかを、ある意味でせきこみすぎるような調子で私たちに示している。感動しないわけにはゆかない。と同時に、それの後半で、主人公たちの生のうえに悲痛さをもつて切迫してゆく物語の展開が十分に現実にはなにかの構造をもたず、作家たちのイメージーションがぼんやりと孤独に沈みこんでゆくように畏縮させられていく面に、あらためて現実とむかいあうことの困難さもみないわけにはゆかなかつた。

(ふくまけんじ氏は岡大教養部英語科教官 33才)